

飯田祐子、中谷いずみ、笹尾佳代編著（青弓社、2022年）

プロレタリア文学とジェンダー 階級・ナラティブ・インターセクショナルリティ

菊地 優美*

本書は、「階級」が最重要視されたプロレタリア文学運動のなかで不可視化されたジェンダーの問題を可視化することを目指すものである。

本書に先んじて、同じ編者により1930年前後の雑誌『女人芸術』における女性の闘争主体や文化生産者としての様相を明らかにした『女性と闘争——雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産』（青弓社、2019年）が刊行されている。同書における議論との接続性も有しながら、本書『プロレタリア文学とジェンダー』では、分析対象として1920年代から1950年代までの作品や事象が取り上げられている。

「はじめに」（飯田祐子／中谷いずみ／笹尾佳代）で解説されるように、1980年代前半にプロレタリア文学研究にフェミニズム批評が導入されて以降、女性プロレタリア作家の作品に描き込まれたジェンダーをめぐる問題が可視化されてきた。そうした研究の最前線に立つ本書の新しさは、マルクス主義フェミニズムにおける資本制と家父長制の統一論や、「人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイションなど、複数のカテゴリー」が「複合的に機能している」（14頁）と捉えるインターセクショナルリティといった、近年のジェンダー／セクシュアリティをめぐる議論を踏まえ、より精緻にプロレタリア文学におけるジェンダーの問題を浮かび上がらせたことにある。

以下に、全3部・11章で構成される本書の各章の内容を紹介したい。

まず第1部「プロレタリア文学場におけるジェンダーとセクシュアリティ」では、「プロレタリア文学が書かれ、読まれ、また流通する場の構造に、ジェンダーやセクシュアリティがどのように組み込まれているか」が問われる（14頁）。

第1章（ヘザー・ボーウェン＝ストライク）は、徳永直『『赤い恋』以上』に、情緒上の軋轢を抱え

る活動家夫婦の妻が夫の性差別的な要求と苦闘する姿への肯定を見出し、「プロレタリア作家たちが恋愛とセクシュアリティの家父長主義的理解への異議申し立てを提起」（39頁）する作の一つと位置づける。第2章（池田啓悟）は日本共産党のハウスキーパー問題を再検討し、「女性」そのものが男性党员と区別され、乗り越えがたい「身分」として運動に組み込まれていたと考察する（61頁）。こうした運動内部のジェンダー配置の問題は、つづく第3章（飯田祐子）における「救援」の領域への考察により一層浮き彫りにされる。飯田は、『プロレタリア文学集』（改造社、1931年）から小林多喜二「救援ニュースNo.18.附録」等を取り上げ、闘争運動の再生産領域としての「救援」や「金」を語るナラティブのなかで女性が周縁に配置される過程を明らかにする（89頁）。そこにはナンシー・フレイザーらが論じる「社会的再生産」と同質の力学を見出せることも指摘されている（90頁）。

次に、第2部「女性表象のインターセクショナルリティ」では、プロレタリア文学における女性表象の複数性やインターセクショナルリティを浮上させることが試みられる（15頁）。

第4章（泉谷瞬）は、山川菊栄「石炭がら」が「鉱山労働者の妻／母親たち」の経済的な自活の困難という問題を投げかけていると捉える（110頁）。そして、女性表象を輪郭のみで描くことにより、他の鉱山労働現場に生きる女性の表象と補完的に接続されることで、「鉱山労働に関わる女性を追跡する作業の端緒」となる可能性を見出す（115頁）。第5章（鳥木圭太）は、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」を〈物流〉小説として読み直し、同作における階級の問題がすでにジェンダー化されていることを指摘する（147頁）。そして、「女学生ことば」で綴られた女工の手紙への考察から、同作が「女工」「女学生」「妻」「母」といった複数の文学

* 都留文科大学教養学部学校教育学科

的表象を用いることで、社会的存在としての「女工」を浮き彫りにしていると論じる(146-147頁)。第6章(サラ・フレデリック)は、吉屋信子『女の階級』に、左翼運動が内包する性差別への批判や、シスターフッドと男性共産主義者の同志関係の相似的な配置を見出し、「階級やジェンダーの境界を横断する共感や仲間意識、情熱を上げるための理想の可能性」の探求を読み取る(174頁)。第7章(サミュエル・ペリー)は、「貫戦期」に発表された佐多稲子「白と紫」が、植民地朝鮮に住む日本人女性の経験と皇国女性をまねるパフォーマンスを経て狂気に至る朝鮮人女性の姿との並置を通じて「狂気と帝国主義の交差」を描くと読解し、「帝国の言語と文学をめぐるグローバルな思考と共鳴し合っていた」と評価する(192頁)。

そして、第3部「闘争主体とジェンダー」では、「闘争する主体とジェンダーという観点から、女性たちの闘いがどのように語られてきたか」が、「娼妓」「母」「女工」という三つの女性表象の検討を通じて追究される(16頁)。

第8章(笹尾佳代)は、賀川豊彦を結節点とする労働運動の磁場から誕生した1920年代後半の「娼妓の表象／自己表象の物語」を取り上げる(213頁)。「学び、読み、変化する娼妓像」や、彼女らが労働運動の論理のもと「自由廃業」を遂げる姿を描くそれらの物語の登場について(216頁)、娼妓たちを「労働運動の圏内へと接続しようとする」文化運動と意味付ける(221頁)。第9章(中谷いづみ)は、平林たい子「施療室にて」を、男性ジェンダー化された規範に従う女性闘争主体の「私」が、

規範が抑圧した断ち切り難い他者との関係や身体、施療室の女性たちとの共鳴などの中から再生／覚醒する姿を描いたテキストと読み解く(253頁)。第10章(李珠姫)は、佐多稲子の連作「モスリン争議五部作」が描き出す、多様な立場から争議に関わる女工たちの葛藤と闘争主体としての覚醒の様相、連帯の可能性を論じる(281頁)。第11章(楊佳嘉)は、中本たか子「東モス第二工場」を「無産大衆婦人」の啓蒙小説と定位し(287頁)、女工たちの階級意識の覚醒と成長の過程に見える、階級内部のジェンダーと民族の差異の交差を指摘する(303頁)。そして女工や男性、他民族の労働者との間に新しい関係性の回路を作り直した先鋭性を見出している(304頁)。

本書は、プロレタリア文学運動内部のジェンダー・ポリティクスや女性表象、女性闘争主体の様相を多角的かつ精緻に把握しうる貴重な一書である。本書では、従来のプロレタリア文学とジェンダーをめぐる研究を踏まえた上での新たな課題の一つに、「運動のなかの男性性構築の様相」等も分析の視野に入れ、「『女性』という視点を『ジェンダー』という視点に積極的に組み替え、『女性』の配置を明らかにしていく」ことが掲げられている(13頁)。そうした視座により、各章の女性を軸とした考察や男性性に関わる論及は、男性闘争主体の構築過程をも照らし出して興味深い。このようなプロレタリア文学と男性性の問題も含め、今後のプロレタリア文学運動をめぐる議論の深化の起点となる一冊と言えるだろう。